

高橋喜惣勝文学碑 (富岡)

高橋喜惣勝の名はあまり知られていない

だが天草 (富岡) が産んだ名文学者である

高橋は東京に出て詩作・小説の作家活動に入る

その作品の根底は貧しさに堪え生きる

一般大衆の暮らしと生きざまの表現

そしてふる里天草富岡を舞台にした作品

喜惣勝の代表作は

『海の家族』『歌集天草灘』『天草物語』

昭和二十年春の芥川文学賞候補となり

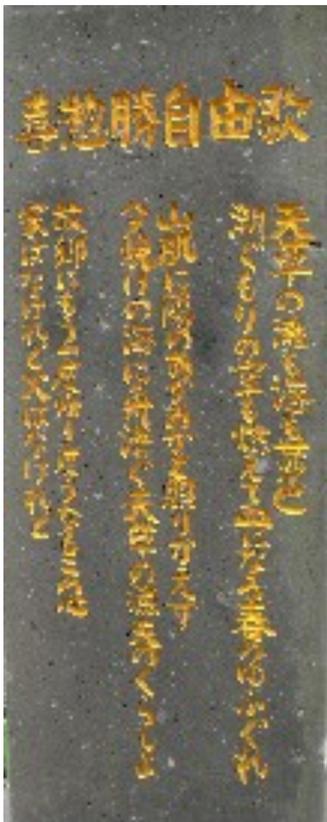
「それでも親はあきらめず」「新文章読本」など

さらに作家活動にいそしむが

過労がたたり四十二歳の若さで病没

高橋喜惣勝は天草近代文学の礎を築いた

天草の誇りたる作家である



富岡町北茶 高橋喜惣勝文学碑

高橋喜惣勝

(1910～1952年) 作家・歌人

高橋喜惣勝は明治43年、旧天草郡富岡町出来町の米と海産物を扱う商家田畑屋高橋家に生まれた。

大正14年、富岡高等小学校を卒業、大阪へ出て、給仕として山下コークス会社に就職。

働きながら大阪泰西学館英語科を卒業し、上京。法政大学政経科へ入学したが、学費続かず中途退学。

昭和4年、父熊太郎死去。

昭和6年、中央パブテスト教会の「我等のグラフ」編集に参加、短歌を本格的につくるようになる。

昭和9年、結婚。

同年、に『歌集天草灘』(240首)を処女出版。

同11年より『短歌評論』の編集発行人となり、口語自由詩の新短歌運動を進める。同13年より創作(小説)に力を入れて『海の家族』

「天草灘」「天草物語」の三部作を発表した。これらは、天草富岡の漁業と商業の物語で、自家の斜陽から故郷を出て苦学し貧困にめげずに生きる著者の、天草を望郷する自伝的小説である。

昭和17年、治安維持法違反として「短歌評論グループ」の検挙に連座、巢鴨拘置所に送られる。翌年懲役二年、執行猶予4年の判決を得て出所。

昭和19年、「技術史」を国枝枝治の筆名で発表、翌年芥川賞候補作品となる。これは熊本県では初。

我が身を削るような家族物語である『それでも親はあきらめず』、谷崎潤一郎の文章読本に勝ると云われた『新文章読本』は高橋の名著となる。

昭和27年、脳溢血で倒れ、6月12日、42歳の若さで死去。

高橋喜惣勝は、一般には知られていないが、リアリズムに基づく天草近代文学の基礎を築いた名歌人・作家である。

高橋喜惣勝の作品に一貫して流れるのは、生活歌人、生活作家ということである。それ故、天草の石川啄木と称する人もいる。

短歌については全くの門外漢であるので、ここは、天草の歌人第一人者である、故濱名志松氏の言葉を借りて、高橋喜惣勝を評したい。

満州事変から三年目、日本経済は不況の底にあり、特に農漁村はみじめな生活にあえいでいた。可憐な少女たちが八百円前後で売り飛ばされていった過酷な時代であった。天草のような耕地の乏しい農村や、単純な漁撈に頼つての漁村の窮状は極度に逼迫していた。

歌集「天草灘」を詠んだ高橋喜惣勝は、この最悪の時代に富岡町で幼少期を過ごし、天草の風土と生活を詠んだ。当時短歌不毛の天草で「天草灘」の外、「世紀の歌」の歌集も残している。作品の内容から啄木の影響を多分に受けただろうと私は推測している。熊本県短歌史上にも特筆される時代把握と表現を持つている。『歌集岬』231号

天草が産んだ作家としては、島一春がいるが、ともに同じ流れの作家と云えよう。それは、青年期、共に苦労したことでも共通する。作品も故郷を舞台にし、自伝的なものが多いのも共通点である。

高橋喜惣勝の作品は『天草灘物語』鶴田文史編著 近代文芸社刊で読むことができる。

歌集『天草灘』（抄）

□ 故郷の歌

天草の灘も港も茜色

潮ぐもりの空燃えて血になる

春のゆふぐれ

夜逃げする家娘売る家

それぞれにあえぎ苦しむ

故郷の家六八八戸

山肌に陽のあかあかと照りかへす

夕焼けの海に

舟漕ぐ天草の漁夫のくらしよ

故郷にもう一度帰り度うなるこの心

家はなけれど

父もなけれど

□ 自伝の歌

父は町のエライ旦那様

兄は船場の少年店員、姉は養蠶

末子の俺は道路人夫にまでなつた

あばら家に

育つた俺ではないけれど

育つた氣持が今はしている

金はいらない戀はいらないと誇つたが

俺は負けた

金も戀も俺はほしかつたのだ

腎臓を病みて

飢えれば古本を抱えて

古本屋にゆくこのごろの生活

□ 父母の歌

寂しいといふ

寂しさでない寂しさを

俺は味わふ、母を想へば

代筆の手紙を添へた小包が

われを泣かせる

惨めに生きて子を想う母心が

風吹けば母親を想ふ

雨降れば

孫を背負える母親をおもふ

痩せこけた背筋をなでて

中止された救農工事場の

人影の中に母もゐた

□ 生活の歌

働ひても働ひても
生きてゆくだけ
——芋がゆすすり

高橋喜惣勝 作品

『歌集天草灘』

『海の家族』

『神の仁義』

『天草灘』

『天草物語』

『技術史』

『獄のあけくれ』

『それでも親はあきらめず』

『新文章読本』

※太字は天草三部作と云われる

《参考資料》

『天草灘物語』

鶴田文史編著

近代文芸社



高橋喜惣勝 (20歳頃)

『天草灘物語』より
熊本近代文学館蔵